

大学生の学業意欲と大学適応について

上田佳苗*・恒吉徹三

On University Students' Motivation to Study and Adaptation

UEDA Kanae, TSUNEYOSHI Tetsuzo

(Received September 27, 2013)

キーワード：学業意欲、適応感、意欲上昇要因

I 問題と目的

大学での学びの意欲と大学生活への適応とはどのような関係にあるのだろうか。下山(1995)は、大学生の無気力や神経症について、大学入学1カ月後より単位さえそろえば良いと考えていた男子学生が、授業に出なくなった事例を通して検討しており、無気力状態になると、大学生活に対しても適応的でなくなることを指摘している。一方、中高生を対象者とした下坂(2001)は、無気力感が学校適応と関連していることを明らかにしている。しかし、意欲は学校・大学生活の中で一貫したものではなく、変動することを前提にとらえる必要がある。

学業意欲の変動について大学生自身がどのような理由づけを示すのかを量的に検討した松島・尾崎(2009)は、1年次に意欲低下を実感している学生が多いと指摘している。しかし、どのような要因によって意欲が変動したかについては検討されていない。

大学生の一般的な特徴として、講義への出席率や大学生活における学業の位置づけが上昇したことを溝上(2004)は指摘している。しかし、講義への出席率が大学生の学業意欲と関連しているとはいえない。一方で、講義など学業面では意欲が低下していても、他の面では意欲が低下していない学生もおり、無気力や神経症(スチューデント・アパシーなど)状態にあるとして研究がなされている(例えば下山, 1995)。無気力状態ではない学生であっても、学業意欲が低いことと大学適応との関連性について検討する必要がある。

そこで本研究では、調査1で、学業意欲と適応感がどのような側面で関連しているのかを検討し、学業意欲と適応感、学業意欲が再び上がった要因(以下、意欲上昇要因)はどのような関係にあるのかを、因果モデルを作成して検討することを目的とする。さらに、調査2で、事



Figure 1 仮定した因果モデル

* 山口大学大学院教育学研究科学校教育専攻学校臨床心理学専修

例を通して、一度意欲が低下した場合に意欲の回復に影響を与える要因について検討する。学業意欲と適応感、意欲上昇要因の因果モデルについて、意欲上昇要因により学業意欲や適応感が上がると仮定し、Figure 1 のような因果モデルを仮定する。

II 調査 1

1. 方法

調査対象者 A大学の学生83名、B大学の学生104名の計187名。有効回答は、回答に不備があった8名を除いた179名（男性33名、女性146名、平均年齢20.47歳、 $SD = 1.48$ ）。

調査期間 11月下旬、12月上旬

手続き 講義の時間に質問紙を一斉配布し、回答を求めた。

質問紙の構成

①フェイス項目（学部、学年、年齢など）

②質問項目

a. 下山（1995）の意欲低下領域尺度：15項目（5件法）。

b. 学業に対する姿勢尺度：学業に対する姿勢を細かい行動レベルでみるための新たな項目を作成。16項目（5件法）。

c. 意欲上昇要因尺度：学業意欲が下がり、再び上がったときの要因を尋ねる項目を作成。22項目（5件法）。

d. 大久保・青柳（2003）の大学環境への適応感尺度：29項目（5件法）。

2. 結果

1) 意欲低下領域尺度と学業に対する姿勢尺度の分析 学業に対する姿勢尺度は、意欲低下領域尺度にはない、学業に対する姿勢を細かく尋ねたものであるため、意欲低下領域尺度と合わせて分析した。フロア効果が見られた項目を除外した26項目について因子分析（主因子法、Promax 回転）を行った結果、3因子構造が妥当と考えられ、それぞれの因子を「勉学意欲低下」因子、「大学意欲低下」因子、「授業意欲低下」因子と名付けた。

2) 意欲上昇要因尺度の分析 フロア効果が見られた項目を除外した13項目について因子分析（主因子法、Varimax 回転）を行った結果、3因子構造が妥当と考えられ、それぞれの因子を「現状への危機感」因子、「授業への興味」因子、「支えの存在」因子と名付けた。

3) 大学環境への適応感尺度の分析 29項目について因子分析（主因子法、Promax 回転）を

Table 1 各尺度の記述統計量

	N	平均値	標準偏差	分散
勉学意欲低下	179	3.13	.53	.28
大学意欲低下	179	2.18	.65	.42
授業意欲低下	179	2.34	.86	.74
被信頼・受容感	179	3.27	.53	.28
拒否感の無さ	179	3.86	.72	.51
課題・目的の存在	179	3.81	.62	.39
現状への危機感	40	3.14	.84	.71
授業への興味	40	3.06	.96	.92
支えの存在	40	3.11	.79	.62

行った結果、3因子構造が妥当と考えられ、それぞれの因子を「被信頼・受容感」因子、「拒絶感の無さ」因子、「課題・目的の存在」因子と名付けた。

4) 各尺度の記述統計量

各尺度の記述統計量を Table 1 に示す。尺度得点は、尺度の項目の平均値を算出した。

5) 意欲低下領域と適応感の関連 意欲と適応感がどのように関連しているのかをみるため、相関係数を算出した (Table 2)。

Table 2 意欲低下領域と適応感の相関

	被信頼・受容感	拒絶感の無さ	課題・目的の存在
勉学意欲低下	-.14	.12	-.14
大学意欲低下	-.53**	-.38**	-.71**
授業意欲低下	-.10	.17*	-.17*

** $p < .01$, * $p < .05$

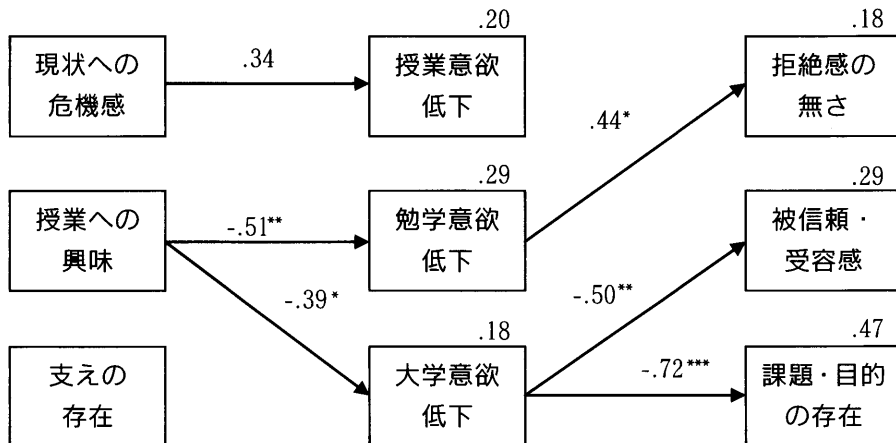
勉学意欲低下は、適応感のどの下位尺度とも相関がなかった。大学意欲低下は、適応感の下位尺度すべてと有意な負の相関を示し、授業意欲低下は、拒絶感のなさ、課題・目的の存在と有意な弱い負の相関を示しており、学業への意欲は適応感と関連があるといえる。

6) 意欲の高低と適応感の相違 意欲の程度によって適応感に違いがあるのかをみるため、 t 検定を行った (Table 3)。意欲低下領域尺度の尺度得点の平均値が7.65点であることから、7

Table 3 各群の適応感の平均値

	意欲高群		意欲低群		t 値
	M	SD	M	SD	
被信頼・受容感	3.38	.49	3.12	.54	-3.38**
拒絶感の無さ	3.95	.67	3.74	.77	-1.96
課題・目的の存在	3.99	.55	3.58	.63	-4.58***

*** $p < .001$, ** $p < .01$



*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

Figure 2 因果モデル

点以下を意欲高群、8点以上を意欲低群に分類した。

高群・低群の得点差は有意であった。意欲が高い方が、適応感も高いと考えられる。

7) 因果モデル 学業意欲が下がり、再び上がった経験のある学生を対象に ($n=40$)、学業意欲、適応感、意欲上昇要因がどのように関連しているのかを検討するため重回帰分析を行った (Figure 2)。

授業への興味が勉学意欲や大学意欲に影響を与え、さらに、適応感に影響を与えているというモデルとなった。意欲上昇要因は、適応感には直接影響しておらず、意欲上昇要因によって学習意欲が上がることで適応感を上げることにつながっていると考えられる。

Ⅲ 調査2

1. 方法

調査対象者 入学してから現在までの間で、学業意欲が下がり、再び上がったという経験がある学生1名。

調査期間 12月下旬～1月上旬

手続き 1回30分～60分の半構造化面接を行った。調査対象者の了承を得た上で、インタビュー内容を録音した。その後、大学入学から現在までの、学業に対する意欲の変動を記入させたグラフをもとに、学業に対する意欲が下がった時期や上がった時期にどのような出来事・きっかけがあったのかを、自由に話してもらった。その後、あらかじめ用意した質問のうち、自由に話してもらった内容と重複していない質問に回答してもらった。逐語録の作成後、あいまいな点については、後日再びインタビューを実施した。

2. 事例

調査対象者 Cさん (女性、19歳)

意欲が下がった要因は、どの程度テスト勉強をすればいいのかわからないことであった。学業に対する意欲は非常に高いが、要求水準も高いために、本人の思うようにいかない場合に意欲が低下していると考えられる。意欲が低下していても「やらなければいけない」という意識を強く持っており、やるべきことはやれているため、適応的な側面は保たれているといえる。Cさんにとって親の存在が支えとなっており、また、成績優秀者を目指すという高い目標をもっているため、その目標を達成できないかもしれない出来事 (今回の場合、テストがうまくいかなかったこと) に直面し、奮起したことが、意欲上昇の要因となっている。

Ⅳ 総合考察

本研究では、学業意欲と適応感、意欲上昇要因についての関連の検討を試みた。その結果、授業意欲と大学意欲は適応感と関連していたが、勉学意欲は適応感とは関連がなかった。勉学意欲については、自ら積極的に勉強するという項目内容が多かったことから、自主的に勉強をすることと適応感には関連がないと考えられる。また、意欲の程度によって、適応感に相違がみられ、意欲が高い方が適応感も高いことが明らかになった。さらに、因果モデルについては、授業への興味が低いと勉学意欲や大学意欲が低くなるというモデルとなっている。このことは、事例的に検討したなかで、Cさんが「授業をおもしろいと感じなくなり意欲が下がったこと」

と述べていることと一致している。また、因果モデルで、授業意欲が低下したときに現状への危機感が高まったという結果と、Cさんが、意欲が低下しているとき、意欲が低下している現状そのものに危機感を覚え、「やるしかない」と思って意欲が上がる要因となっていることと一致している。

調査1では、他者からのサポートは意欲上昇要因ではないが、調査2では意欲上昇要因であった。調査1の「支えの存在」因子には友人からのサポートの項目しかなく、調査2では、家族が挙げられているため、今後は友人以外からのサポートについて検討する必要があると考えられる。

文献

- 大久保智生・青柳肇 (2003). 大学生用適応感尺度の作成の試み—個人—環境の適合性の視点から. パーソナリティ研究, 12, 38-39.
- 下坂剛 (2001). 青年期の各学校段階における無気力感の検討. 教育心理学研究, 49, 305-313.
- 下山晴彦 (1995). 男子大学生の無気力の研究. 教育心理学研究, 49, 145-155.
- 溝上慎一 (2004). 現代大学生論 ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる. 日本放送出版協会.